

水環境・生物(2) (2-C-10-4~2-C-12-1)

本セッションでは 6 件の発表がおこなわれ、内容は海藻や定生動物の消長及びそれに影響を及ぼす因子について検討したものが多かった。

10-4 では宮城県雄勝湾におけるウニのワカメに対する摂食行動を流動の観点から整理し、静穏場でのウニによる摂食圧の増大の可能性を示した。さらに浮き藻礁を用いた観測により、同様の流動場においてもウニの摂食圧を低減することによりワカメ生存率が向上するという知見が示された。11-1 では三保海岸における 1971 年と 2004 年の底生生物及び地形データを比較することにより、海底地形変化が底生動物に及ぼす影響について中長期的視点から考察がおこなわれた。11-2 では同じく三保海岸における半年程度の時間スケール内での底生生物の消長に着目し、夏季の荒天時の攪乱に伴う海岸侵食が底生生物の減耗に与える影響について言及していた。

11-3 はイボニシの imposex に対する有機スズ類の影響についての発表であり、1998 年から 2004 年にかけての調査結果からは回復傾向にあることが示された。しかしながら、いまだに影響が残る水域もあるとの指摘がなされた。11-4 ではアナジャコの形態異常に対して水質及び底質の悪化が及ぼす影響についての考察がなされた。いくつかの可能性についての指摘があり、今後はこれらを裏付けるデータの蓄積が期待される。12-1 では北海道で大量に発生する貝殻を利用し、デトリタス食性の生物の生息場を創出することによる水質・底質悪化防止技術が紹介された。現場実験結果から本技術の適用により環形動物や節足動物の増加が認められ、有機性沈降物質の分解が促進される可能性が示された。

沿岸域における底生生物は沿岸生態系を構成する重要な要素であると共に、沿岸域の環境状態の指標ともなる貴重な存在である。この意味において、本セッションで議論された内容は非常に興味深く、それらの重要性が広く認識されるものであると思われる。今後はより普遍的な知見となるよう、より定量的なデータ収集及び考察が期待される。

(港湾空港技術研究所 井上 徹教)